

Project brief 2

プロジェクト紹介【寄稿】

市民・団体・企業・行政の協働で進める「えびなの森づくり」

宮崎久美子

MIYAZAKI Kumiko
株式会社千代田コンサルタント
地域整備部
総合計画課長



はじめに

神奈川県海老名市は、小田急小田原線、相鉄線、JR相模線の鉄道3線の結節点である海老名駅を中心とした賑わいのある都市です。また、東名高速道路やさがみ縦貫道路のIC・JCT開通により、ますます交通アクセスのよい都市になっています。一方、田園風景が残り、南北に縦断する相模横山九里の土手があるなど、比較的水と緑が多いまちです。

このような海老名市は、利便性と自然のバランスがとれており、その魅力発信を「都市ブランド事業」として取り組んでいます。「えびなの森創造事業」は都市ブランドの一つとして、市制40周年を迎える

平成23年度に向けた4年間に、市民・団体・企業・行政が一体となって市民1人1本の植樹を行い、合計125,000本を目標として植樹を進めています。

緑を守り、育てるとともに、人をつなぐまちづくり。平成20年度から海老名市で始まった植樹を通した緑のまちづくりの活動を紹介します。

起-プロローグ

事業スタートの平成20年度は、市民の声を反映するまちづくりを推進するため、組織づくりから始まりました。えびなの森創造事業の検討組織は、植樹活動に関わる組織代表者30名程度による「実

行委員会」と、緑や環境に関係する活動団体や企業の代表者15名程度による「推進部会」で構成されています。

最初に、検討を主体的に行う推進部会メンバーで、海老名市の将来像などの夢を語り合いました。子ども達や家族が1本の木を植え育てることにより、自然と触れ合い、一人ひとりの優しい心が育てほしい。そして、市全体を緑豊かにし、一人ひとりの心に刻まれるふるさとの森づくりに近づけたいと。えびなの森づくりといっても、市内に大きな緑地をつくる訳ではありません。大きな森でなくても、身近にある小さな森(1本の木を育てること)が、海老名市民の心を育



図1 えびなの森でつながる



図2 様々な想いを乗せてえびなの森を創造する

- 大きな森 ●駅前広場・中央公園 ●市役所周辺 など
- つなぐ森 ●相模横山九里の土手 ●シンボルロード など
- 守り・遊ぶ森 ●今ある里山・雑木林 ●鎮守の森・屋敷林 など
- 使い・楽しむ森 ●公園・学校・公共施設 ●えびな茶の森、畑 など
- 生き物とともに暮らす森 ●相模川河畔 ●水田 など

様々な表情をもった森が集まり
心に刻まれるふるさとの森
『えびなの森』
がつくられる

図3 心に刻まれるふるさとの森



写真1 海老名市で育った木で作ったコースター

てることにつながると考えました。

部会は、自由な討論ができるようワークショップ形式を基本としています。えびなの森づくりに対する市民からの意向は、市民アンケート調査や駅前ヒアリングを踏まえ、指針という形でまとめられました。

その頃、部会メンバーは「12万5千本の植樹を達成できるだろうか」と不安を持っていました。しかし、市民が管理している川崎市の浮島町公園の視察で一気に解消。市民や川崎市の皆さんから貴重な話を伺えたことに加え、記念植樹もさせていただいたことで不安が楽しみに変わりました。参加した皆さんの気持ちが一つになり、「がんばれば目標を達成できる」と感じた瞬間でした。

そして、植樹活動を市民植樹祭という形で紹介。これから始まる森づくりの第一歩として、手作りのコースターを市民の皆さんに配りました。

承-物語の始まり

部会や市役所のメンバーが話し合ったアイデアをすぐ実行する行動力があったことは、えびなの森づくりが推進される理由の一つです。

森の恵みをみんなで共有する。例えば、森の中できのこをつくり、料理をして味わうような楽しみの共有はとても重要です。この発想

は、市民植樹活動の後、手作りの芋煮を振る舞うような食事の「おもてなし」へとつながっています。

都心に近い海老名市と異なる自然が広がる姉妹都市、宮城県白石市での植樹交流も行いました。植樹地の提供ということ以上に、異なるまちの人たちが植樹を通して、共に緑を育てる心を支えあい、楽しみ、みんなで笑顔になりました。

その他、企業の積極的な植樹参加として、企業敷地内での植樹を行いました。市道の開通を祝って、沿道に背丈以上ある桜並木をつくりました。その記念に想いを込めメッセージプレートをつけました。道を通る度、植樹した人がその時のことを思い出すに留まらず、プレートを読んだ人も心温まり、それが市域へ伝播していきます。えびなの森づくりは人の気持ちを育みます。人が変わればまちは変わります。

この桜並木の道に隣接する未利用地が3,000m²程生じました。この土地が、翌年から検討するまちなか活動拠点の森となりました。

転-緑の維持管理

植樹しただけでは、緑を育てるまちづくりにはなりません。木は生き物。加えて大きく育つにはかなりの時間を要します。そのため、緑の維持管理が付いて回ります。人は植樹した後、木の成長を見守り、手入れをして、大きく育てなければなりません。平成23年度秋の事業完了を翌年に控え、その後のことを考えておく必要を感じた頃でもありました。緑の維持管理や人材育成、森の中での遊びを育

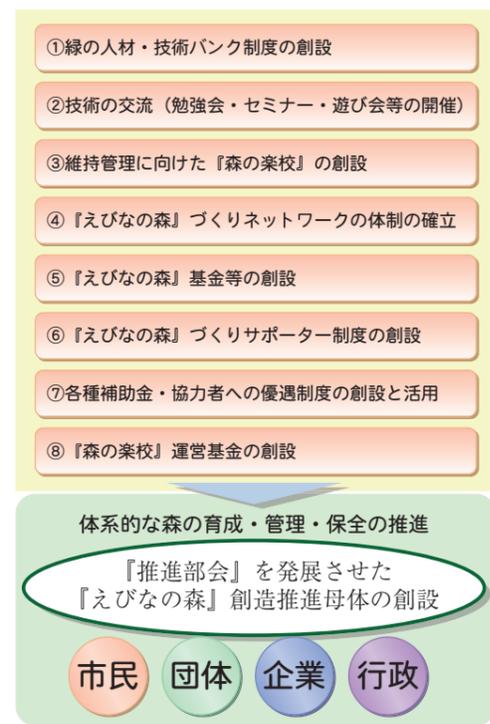


図4 森づくりのための協働



写真2 川崎市の浮島町公園の視察

み、支える組織を「えびなの森の楽校」というもので引き継ぐこととしました。

組織のあり方や運営方法などを勉強するため、緑の維持管理に取り組んでいるNPO法人国分寺ふるさとを守る会の視察や、まちなかに里山の緑を取り込む活動を行っている方にヒアリングしました。

活動拠点としては、前述した未利用の「三日月地」(形が三日月形)を活用することになりました。部会メンバーで、緑陰や子ども達の遊び場となるよう、楽しい仕掛けや平面イメージを検討しました。緑と水は切っても切れない関係なので、「井戸を掘ってみたい」「池をつくって生物が豊かな場所をつくりたい」「広場機能を持たせたい」「散策もしたい」などの様々なアイデアが形になりました。



写真3 姉妹都市宮城県白石市での植樹



写真4 市民植樹祭



図5 森づくりの3つの柱

続-「えびなの森の楽校」開校へ

1本1本の植樹が、平成23年7月末現在、108,246本になりました。10万本突破で、目標まであと少しです。みんなで考え行動し、活動を広げた結果です。そして、市制40周年を迎える今年、事業が一区切りする年、部会メンバーの解任の年です。しかし、緑のまちづくりは今後も「続」きます。

「えびなの森の楽校」については、市民に根付く緑のまちづくりを推進する組織としてスタートを切ります。えびなの森づくりを市民の皆さんに伝え、広げていく必要が

あります。開校にあたっては、市民に広く参加を呼びかけることにし、『広報えびな』7月15日号にて募集が始まりました。「市民の方の反応はどうか」「どの程度の方が集まってくるか」などと期待と不安が入り混じった気持ちです。

市民植樹も根付き始め、毎回応募してくださる方も増えてきました。植樹することは楽しく、その木をみんなで見守り育てることも同様に楽しく進めたいです。4年目を迎えたえびなの森づくり、今後引き継がれる「えびなの森の楽校」の運営、手作りの森「三日月地」の整備



写真5 海老名市内企業での植樹



写真6 市道開通記念植樹



写真7 市役所前の里山キッド



写真8 市民植樹祭で中学校の皆さんと植樹



写真9 NPO国分寺ふるさとを守る会の活動視察

など、森づくりを推進してきた部会メンバーの溢れる想いで、開校に向けた準備は真最中です。

海老名市が全面支援してきた事業という形での「協働のまちづくり」から「市民主体のまちづくり」へ。えびなの森創造事業は形を変え、より広い市民参加による海老名スタイルで羽ばたこうとしています。

おわりに

よりよいまちづくりを進める上で大切な視点。それはまず、その土地をよく知ること。その土地に生きる人と心を通い合わせることが大切であると感じています。業務支援を行うコンサルタントとしては、「ひと・もの・こと・かね」という地域資源を生かす「知恵」を絞り、まちづくりの課題を解決していくことが求められます。

その中で「ひと」が大きな役割を

担う時代です。「ひと」が変われば、関係する「もの・こと・かね」の流れが必ず変化し、それが展開し「まち」も変わります。時間は多少かかっても、話し合うことで課題を解決していくきっかけを得て、諦めずに対応していく。これが基本であると思います。

4年続くプロジェクトを通して、市民参加のまちづくりの素晴らしさを知ることができました。供に苦

労を乗り越え、新たな一歩を踏み出したい思いです。最後に、推進会議副会長兼推進部会長の伊藤健三先生のメッセージをお送りします。

豊かな緑は私達の心に潤いと生きる力を与えてくれます。このかけがえのない財産を次の世代に遺していくのは私達の仕事です。

えびなの森創造事業ホームページ
(<http://www.ebinanomori.jp/>)



図6 「えびなの森の楽校」整備イメージ